

## 近世後期の類聚的『源氏物語』注釈書と古辞書

後藤幸良

### 1. はじめに

『源氏物語』の注釈・研究は、平安時代の世尊寺伊行の『源氏釈』以来、膨大な蓄積がなされて現在に至っている。その注釈・研究のスタイルは、こと近世以前に関する限り、物語の表現がより所とする和歌・歌謡・漢籍・仏典などを、物語の表現の出現の順に指摘していく体裁を取るものが圧倒的多数を占める、と言ってよい。これは、注釈・研究の究極の目的が『源氏物語』の世界の、一層の味読であったことに由来する、必然的な事態であった。表現空間の本来の魅力は、時が過ぎ社会が変容し流通する文学作品が変遷するにつれ見失われていく。その魅力を取り戻すことに目的があったから、『源氏物語』の冒頭から末尾まで表現の出現順に注を付していき、その背景に暗黙の前提として存在するであろう理想的な表現空間を回復しようと試みるのである。

しかし近世も後期に入ると、それらとは別の配列原理をもった注釈書があらわれてくる。大きく言って、和歌集的な配列をもった注釈書と、辞書的あるいは類書的配列を持った注釈書とである。それぞれ前者は和歌実作上の必要と、後者は語学的興味と、何程かかわって成立したと思われる。またその二つの注釈書群は、前記した物語表現の出現順に注記していく体裁を持たないことからすると、物語世界の味読からは一応離れて、物語を整理していこうとする志向も持っている、と考えられる。本稿では後者の、辞書的あるいは類書的配列を持つ注釈書を紹介しつつ、それらの注釈書の配列が古辞書の配列方法を参考に実現していることを探ってみたい。

### 2. 類聚的注釈書

表1に何らかの標目による分類方法を採用する、『源氏物語』注釈書を掲げた。注釈書の大部分は述べたように、『源氏物語』の問題となる表現の出現順に、和漢の関連する典籍を列挙する様式を持つが、それらの注釈書は除外してある。また『無名草子』を嚆矢とする評論的注釈や、特定のコトガラ——衣服、調度、音楽など——についてののみ部類した注釈も除いた。

表を見てまずわかるのは、室町時代初期の『仙源抄』以後、イロハ分類の注釈書が主流となって何種か作られ、五十音順の注釈書が出来たのは江戸時代後期の『源氏物語玉の御須磨流』まで見あたらないことである。辞書の配列は近世まではイロハ順の方が五十音より優勢であったといわれ、このような大勢を反映してのことであろうが、一方では『仙源抄』の評価の高さがその後に影響を与えた面もあるのだろう。『仙源抄』は跋文で以下のように述べる。

ふるき釈どもを尋ね見侍るに、いづれも簡要はすくなく、枝葉はおほし、又同釈共所々にありて、ひらきみるにわづらひあり。是によりて、水原抄五十余巻、紫明抄十二巻、原中最秘抄二巻の中、古人の解釈よりはじめて、句を切、声をさすに至るまで、一ふしあることを残さず。又定家卿が自筆本に比較して、相違のことをかんがへつゝ、同じ文字なる詞

を、いろはの次第にあつめとゝのへて見れば、六十余巻只一帖につゞまり、文字のつみで  
を尋ぬれば、掌をさすがごとし（本文は群書類従本による）。

『奥入』から『河海抄』に至るまでの注釈の膨大な蓄積を背景に、それらをより簡要にして整理し検索の便を図るために、イロハ順を採用するという。この方式が、画期的なものであったことについては、重松信弘氏の以下の指摘がある。

この書が今までに例を見ない辞書の形式である事と、難義として研究家が最も力をつくした故実有職・準拠・引用の方面を、大胆に削除した事とは、意義深いものがある（『増補新攷 源氏物語研究史』風間書房、昭55・10、151頁）。

また伊井春樹氏も以下のように述べる。

鎌倉期において研究が多方面に進展し、諸説の入り乱れていた様相も、南北朝にいたってようやく集成・統合される傾向を帯びてくる。南朝の長慶天皇による、語句をいろは順に並べて注記を加えた『仙源抄』は、前代以来たどってきた解釈の総まとめといってもよく、諸注を集成したうえで簡要を旨とし、読み易さを求めていこうとする（「付章第一 源氏物語研究史概説」『源氏物語注釈史の研究』桜楓社、昭55・11、1150頁）。

この後『仙源類聚抄』『続類字源語抄』『続源語類字抄』『水滴色葉類聚抄』と、『仙源抄』を増補・改訂したような注釈が続き、また『源氏目安』『源氏註解』『源偶篇』といったイロハ引きの『源氏物語』の辞典が続くことになるのもゆえなしとしない。以前の注釈書が『源氏物語』の具体的細部に密着していたのに比べ、このイロハ引き配列は結果として、五十音配列と同じく、より『源氏物語』のコトバの体系そのものに視野をずらしていつているといえよう。

また江戸時代後期になると、イロハ引きとも五十音順とも異なり、意義分類を採用した『源氏物語』の辞書・事典的な書物も作られるようになる。五井純禎<sup>としさだ</sup>の『源語詰』は「天文地理時侯居所宮室鬼神」「虚詞」「人倫支體草木禽獸蟲魚」「服飾器財」「人事」の各項目に分け、巻順（内部は一部イロハ順）で、語釈を列挙する（注1）。それに改訂を施したのが、『源語梯』で、イロハ順——その内部を意義分類（「虚詞人事」「天地時侯」「人倫支體」「生植氣形」「服食器財」）に分かつ（注2）。また源義亮の『源語類聚抄』も同様にイロハ順で、内部は、『源語梯』と殆ど同じく「虚辞（詞）人事」「天地時侯」「人倫支體」「生植氣形」「服食器財」に分かっている（注3）。また意義分類のみによって、その項目を十九部 870 項目まで膨張させた、『源氏物語麻袋』もつくられた。

### 3. 『源氏物語麻袋』の項目の紹介

『源語詰』『源語梯』『源語類聚抄』の項目内容については、表の内容説明に尽きている。しかし『源氏物語麻袋』の項目全体が紹介されたことは、これまでなかったようである。そこで『源氏物語麻袋』の簡単な書誌と、項目の内容を以下紹介しておきたい。『補訂版国書総目録』には、写本が大東急記念文庫本と桃園文庫の他に竹柏園文庫にあると記されているが、今回実見できたのは以下の二本である。

1. 大東急記念文庫本（整理番号：43 / 13 / 3406）二十四巻、三十冊。縦22.8 糎×横17.0 糎。袋綴、楮紙。索引表紙。外題は表紙左に打ち付け書き。一面十行、有界。竹柏園文庫印、月口屋印。跋文「源氏物語麻袋（廿六本百巻）榎並隆璉」。外題の「ぬさふくろ」部分は、一冊ご

とに、字母（万葉仮名や変体仮名）を変えてある。内容は、意義分類——巻順に該当の用例を掲げるといふ体裁を採る。

2. 桃園文庫本（整理番号：桃9 / 45 / 5 《1》 - 《3》）十八巻、五冊。縦22.6 糎×横15.8 糎。袋綴、楮紙。索引表紙。外題は表紙左に打ち付け書き。一面十行、有界。青谿書屋印。巻一「天部」と、巻十八～二十四の「虚詞部」が欠。

大東急本と桃園本の冒頭の「目録」の、現存部分は、ほぼ完全に一致する。今回は時間の制約があり、大東急記念文庫本については、冒頭の「目録」に列挙されている「項目」（以下「目録の項目」と略す）を筆写するに止まり、本文内部の個々の「項目」との比較はできなかった。桃園文庫本によれば、「目録の項目」は、本文内部の個々の項目とはままたま字体や配列順が異なるなどの異同があるが、各丁肩にある「標目」とは一致することが多い。これはこの書物の成立の仕方について示唆する点が多いと思われる。すなわち個々の項目を立て、その物語の表現を類聚する作業を具体的に進める、その一方で、項目自体に即してそれをより包括的全体的にしていく作業が、「目録の項目」「標目」の作成を通じて、進められていたのではなからうか。前者の具体的作業と後者の全体的俯瞰的作業が、完全に一致していないことには、この書の未定稿的面が幾分かうかがわれると考えられる。しかし詳細な考察は、他日を期す他ない。以下、より完本に近い大東急記念文庫本の、「目録」に拠って、分類項目を示す。〈 〉内は小字部分、《 》内は稿者の注で、便宜上通行の字体に改めた箇所がある（以下同じ）。

#### 天部

天〈天下〉 / 日〈日本〉 / 月 / 星 / 天河 / 虚空〈上〉 / 風〈嵐 山おろし〉 / 雲 / 霞 / 雨〈時雨〉 / 露 / 霜 / 霰 / 霰 / 雪 / 氷 / 雷 / 電〈稲妻〉 / 闇 / 虚空〈下〉 / 虹 / 晴 / 陰 / 滴〈影〉

#### 歳時部

年 / 月 / 日 / 時 / 四時 / 寒暑冷温 / 春 / 夏 / 秋 / 冬 / 世 / 節分 / 年號 / 正月 / 二月 / 三月 / 四月 / 五月 / 六月 / 七月 / 八月九月 / 十月 / 十一月 / 十二月 / 節 / 干支 / 夜 / 次 / 宵 / 晝 / 暁 / 曙〈東雲 明暮〉 / 朝 / 夕 / 明 / 頃 / 乎理 / 先後 / 間 / 程 / 往日来 / 始終 / 旧新 / 古今〈昔〉 / 彼岸 / 庚申 / 暫 / 忽 / 限 / 極 / 剋 / 早 / 久

#### 方位部

方 / 方違 / 東西南北 / 乾坤〈巽艮〉 / 前後 / 本末 / 豎横 / 上中下 / 程 / 左右 / 内外 / 向 / 奥端 / 辺凌 / 間〈安波比〉 / 表裡 / 庁 / 半 / 底 / 跡 / 傍 / 高低 / 遠近 / 此面彼面 / 隅 / 蔭 / 際 / 隈 / 隠 / 許

#### 地部

地〈土 黄泉〉 / 岩〈巖〉 / 砂 / 石 / 塵 / 國 / 郡 / 京 / 都 / 里〈故郷 山里〉 / 駅 / 関 / 道 / 市 / 野 / 原 / 藪〈叢〉 / 庄〈牧〉 / 森 / 田〈畠〉 / 田舎 / 町 / 陸 / 井 / 林 / 岡 / 山〈山彦〉 / 峯〈尾上〉 / 坂〈九折〉 / 鄙 / 嶽 / 穴 / 陵墓 / 谷 / 棧 / 岨 / 麓 / 水 / 泉 / 潮 / 湯 / 泥 / 泡 / 泊 / 灘 / 波 / 瀧 / 池〈澤〉 / 瀬 / 淵 / 岸 / 水際 / 洲碕 / 橋 / 海 / 沖 / 磯 / 浦 / 島 / 渚 / 瀆 / 湖 / 渡 / 濱 / 江 / 馬場〈埒 殿屋〉 / 濤標 / 水柵 / 網代 / 境 / 所物 / 地名 /

#### 火部

火 / 燈 / 火災 / 煙 / 紙燭 / 灰 / 炭 / 燈籠 / 炬火 / 篝火 / 埋火 / 庭燎

#### 宮室部

宮／殿〈出居 客人居〉／院／坊〈春宮坊 內教坊〉／臺／局〈曹司〉／壺／打橋〈反橋〉  
／渡殿／馬道／寮〈府司職〉／御厨子所／樂所／大床子／朝餉間／鴻臚館／穀倉院／階〈長  
橋 階隱〉／藏人所／內侍所／宿直所／侍／作物所／廳〈家司 召次所〉／御櫛笥殿／臺盤  
所／八省／陣／內裏／百敷〈九重〉／家〈也加 須麻比〉／宿／屋〈対 放出〉／厩／閨／  
竈／厠／庵／室／館／庭／園／垣〈籬 切懸〉／隣／門〈首途〉／戸〈口〉／軒／廂／局／  
塗籠／倉〈庫藏 納殿〉／床／長押／牀／棧敷／窓／壁〈築地〉／廊〈細殿〉／簀子／高欄  
／柱／桁／板／格子／障子／蓐／座〈埒〉／屏／鞠懸／壇〈棚〉／帳臺／鏝〈鑲子〉／繩／  
苔／瓦〈檜皮〉

#### 神祇部

神／神名／神事〈神樂〉／祭〈祓禊 撫物〉／齋宮〈野宮〉／齋院／神官／神宝／社／鳥居  
／神籬／麻〈幣 形代 祓具〉／注連／小忌／穢／精進〈齋食〉／鬼／靈〈物 物氣 邪氣〉  
／樹神〈天狗〉／變化／怪 異／仙

#### 釈教部

釈教〈業障〉／極樂〈淨土〉／娑婆／涅槃／佛〈本尊〉／觀音／藥師／弥勒／不動／菩薩／  
大日／經中称名／僧〈大德 阿闍梨 驗者 聖 山伏 法師 禪師 修行者 導師〉／優婆  
塞〈新發 俗 入道〉／尼／僧正〈僧都 律師〉／講師／受戒〈出家〉／加持 呪師／修驗  
〈祈〉／願〈願文 賽〉／法事〈忌日〉／寺／堂〈仏間〉／坊／經〈梵字 卷数〉／佛具／  
独鈷／数珠〈念珠〉／幡〈曼荼羅〉／布施〈誦經捧物〉／僧尼服／僧尼調度／地獄

#### 倫部

人〈冠 杵〉／男／女／黨／者〈具〉／我／鰥寡孤独／大人／老／翁嫗／幼〈若人 稚〉／  
童〈総角〉／冠者／代／姫／判者／公私〈當載事部〉／君臣／郎等〈從者〉／主客／聖／民  
〈たひしかはら〉／師〈弟子〉／朋友〈得意とち〉／乳母／武士〈物部 兵〉／方士／有職  
／宿曜師／陰陽師／医／相人／琵琶法師／猿樂／山賤〈貴賤〉／舟子／農／工匠／画工／商  
／水人／遊女／泉郎／鶺鴒飼／鷹飼／仇敵／盜賊〈海賊〉／親戚〈家礼〉／先祖／親／父／母  
／夫〈脊〉／婿／妻〈北方 妹〉／妾／子〈孫〉／女子／兄弟／姉妹／伯父／伯母／甥〈姪〉  
／名／字／姓氏／彼我通称／人名〈古人名 物語中人名〉

#### 支躰部

頭／項／頂／髮〈鬢 鬢〉／鬚／顏／面／頤／額／頬／眉／目／鼻／口／齒／舌／耳／手／  
肱／腕／足／膝／指／爪／肌膚／肩／胸／乳／懷／腹／背／腰／尻／身／姿〈後手〉／面影  
／形容〈色 相似 畸人〉／屍／肝／筋／腸／心〈本意 用意〉／巨々智／性／情／魂／氣  
／命／齡／息／声〈咳〉／涙／欠／噉／鯨／汗／尿／皴／疵／癬／才器／力／病

#### 官職部

官／位／職〈役〉／天皇〈帝王〉／太上天皇〈院〉／東宮／親王／王／執政〈摂政 関白〉  
／大臣〈聽牛車〉／納言〈按察使〉／參議〈非參議〉／大将〈中將 少將〉／將曹〈將監  
六衛府〉／鞍負／左右馬寮／八省／左右京職／太宰帥〈大弐 小弐〉／国司〈受領〉／弁  
少納言／外記史／侍從／內記／藏人／御掛人／宿直人／春宮大夫／中宮大夫〈亮〉／揚名介  
／大学／文章／博士〈才人〉／講師／皇后〈女院〉／御息所／皇女〈尼宮〉／女御更衣／內  
侍／命婦／采女〈女藏人 女官 女別当〉／女房〈後達〉／下仕／女房官名／長女御厠人〈樋

洗) / 御封年官年爵 / 院司 / 五節 / 僧綱 (夜居) / 家司 (政所 別當) / 御庄司 / 預 (守部)  
/ 使 (長奉送使) / 前駟 / 隨身 (小舎人童) / 馬副車副 (牛飼) / 瀧口 / 内舎人 / 舎人 (召  
次) / 侍者 / 侍 / 上達部殿上人 (公卿) / 上臈 (上種) / 下臈 (下種 下部) / 後見 (傳)  
/ 陪從 / 十列 / 新参 / 致仕

#### 衣服部

衣 / 更衣 / 袖 / 裙 / 手本 / 下賀比 / 肩 / 懷 / 冠 (纓) / 烏帽 / 装束 (打目) / 女装束 / 袍 /  
下重 (裾) / 単 / 袴 / 裳 (褶 唐衣) / 直衣 / 指貫 / 狩衣 (襖) / 袷 / 上著 / 褂 / 裱 / 汗衫  
/ 細長 / 帶 / 袴 / 紐 / 糸 (緒 組 網) / 錦 / 綾 / 綺 / 絹 (縑 纈 纈 腰差) / 綿 / 生 (織  
物) / 羅 / 縹 / 布 / 裘 / 紋 (綾) / 袋 / 打鋪 / 覆 / 茵 (敷物) / 衾 (宿直物 襦袢) / 几帳  
(帷 帳台) / 衣架 / 軟障 / 幄 (帘) / 壁代 (地鋪)

#### 飲食部

食 / 飯 (米) / 粥 / 餅 / 粉粿 / 酒 / 肴 / 羹 / 菓 / 水 (氷) / 湯 / 塩

#### 光彩部

色 (艶) / 匂 / 光 / 重色 (雑色 染) / 紫 / 紅 / 白 / 青 / 黄 / 黒 / 赤 / 縹 / 緑 (浅葱) / 紺

#### 器財部

器 (調度 物具) / 宝 / 玉 (瑠璃) / 金銀 / 錢 / 太刀 / 弓矢 (弦 小弓) / 胡瓶 / 斧 / 輦 (輿)  
/ 車 / 舟 / 槎 / 櫂 (櫂櫓) / 祿 (引出物) / 宣命 (表 宣旨 勘文 申文) / 文券 / 文詞 /  
書目 / 絵 / 書 (軸 爪印) / 紙 (帖紙 色紙) / 反故 / 髮上調度 (理髮) / 鋸 / 釵 (簪 掃  
技) / 元結 / 櫛 / 鬢 / 粧粉 / 鏡 (鏡臺) / 筆 / 墨 / 硯 / 手本 / 屏風 / 簾 / 椅子 / 物越 / 座 /  
筵 (地鋪) / 疊 / 胡床 (円座) / 脇息 / 机 / 厨子 (二階) / 琴 (和琴) / 箏 / 琵琶 / 笛 (尺  
八) / 箏 / 笙 / 鼓 (太鼓) / 鐘 / 土器 / 盃 (瓶子) / 秘色 (皿 鉢) / 臺盤 (懸盤 器)  
/ 折敷 / 衝重 (高坏) / 櫛子 (揚器) / 破子 / 檜破子 (髭籠) / 折櫃物 (籠物 籠) / 臺 (花  
足 下机 花机) / 瓶 / 碁盤 (双六盤 彈碁具) / 簍 (筒) / 辛櫃 (細櫃) / 袈 / 筥 / 衣櫃  
/ 泔器 / 盥 / 砧 / 碓 (鐵臼) / 壺 / 大壺 / 扇 (蝙蝠) / 枕 / 臥籠 (火桶) / 杖 / 笠 / 蓑 / 沓  
/ 鞍 (泥障) / 鞭 / 綱 / 香 (薰物) / 菓 (菓玉) / 雛 / 尼兒 / 造花 (挿頭花) / 作物 / 心葉  
/ 絲柱 / 卯槌 / 筒 / 引板

#### 植物部

木 / 花 / 実 / 葉 / 根 / 枝 / 芽 (種) / 松 / 柳 / 梅 / 紅葉 / 桜 / 帚木 / 橘 / 賢木 / 木綿 (當載  
器財) / 薪 (柴) / 桂 / 杉 / 紫檀 (蘇芳 沈香 浅香 丁子 栴檀) / 卯花 / 柞 / 躑躅 / 楓  
/ 柏 / 檀 / 櫟 / 椎 / 梨 (栗) / 竹 / 草 / 前栽 (當載宮室) / 葎 / 棘 / 蓬 / 葛 / 蔓 / 萩 / 蒲萄  
/ 茅 / 蓮 / 垣衣 / 菊 / 笹 / 小竹 / 瞿麥 / 牽牛花 / 夕顔 / 荻 / 苔 / 葦 / 紫 / 海松 (和布) / 藻  
(引干) / 紅花 / 葵 / 龍膽 / 薔薇 / 藤 / 山吹 / 百合 / 萱 / 菖蒲 / 蘿 / 浜木綿 / 苦膽 / 桔梗 /  
三稜 / 紫菀 / 酸醬 / 女郎花 / 蘭 / 薄 / 鴨頭草 / 地榆 / 絡石 (古太珥) / 萱草 / 蒜 / 瓜 / 芹 /  
菜 / 蕨 / 蕨 / 土筆 / 稻 / 山藍 / 《以下「補」》 / 桐 (桐つぼ) / 芥子 (香) / 山梔子 / 胡桃  
/ 藥 / 椿 / 穂 / 実 / あかきこのみ / 橘の実さへはかなく / 実もなくあえか / をしからぬこの  
み / 花も実も / 蓮の実

#### 動物部

鳥〈百千鳥 水鳥〉／羽／卵／巢／鶯／鶉／水雞／千鳥／霍公鳥／雞／鶩／雁／鼻／鴿／都  
鳥／雀／烏／鶴／鷹／鳩／雉／鴨／箱鳥／容鳥／山鳥／呼子鳥／鵲／鶯／獸／象／羊／馬／  
狐／鹿／貉／牛／鼠／鼬／熊／虎／狼／犬／猫／虫／鈴虫／螢／蟬／蚕＊／松虫／蜘蛛／蟻  
／蝶／茅蝸／衣魚／蛭／蜻蛉／魚／貝／龍／鮎／鮪／鮒／氷魚／《以下「補」》われから／  
はた袖／雛／蜂／龜／雷／翡翠

虚詞部《以～止》 虚詞部《知～加》 虚詞部《與～奈》 虚詞部《良～久》

虚詞部《也～天》 虚詞部《安～之》 虚詞部《惠～寸》

\*【茨／虫】の字形。

#### 4. 分類の方法から見た注釈書の性格

ここで『源語詁』『源語梯』『源語類聚抄』三者の関係を確認すると、結論的には従来考えられてきたようにこの順序で影響関係があり、三者は一つのグループとして見なすことができる。まず『源語詁』と『源語梯』について言えば、従来前者を改訂して後者が出来たとされている。このことは「源語梯弁」に「タノ本書（引用者注：『源語詁』を指す）ノマニテ梓スレハ掠奪ノ恐リアルニヨリ務メテ面目ヲ改変シ」とあることにも窺われる。具体的には例えば「服食器財」の項について両者を比較してみると、『源語詁』の「服食器財」を前から後ろへとイロハ別に単語を拾っていくと、『源語梯』の「服食器財」とほとんど一致する。逆に『源語梯』から『源語詁』への過程として考えようとしても、たとえば『源語梯』で「い」の「服食器財」の2番目の項目である末摘花巻の「いまやう色」が、『源語詁』では「服食器財」の末摘花巻箇所の後半部にあること（全18項目中、14番目）の説明がつかないなどといった疑問が、生ずるのである。また『源語梯』と『源語類聚抄』の関係については、齋木泰孝氏（4）や岡陽子氏（5）が、注文の比較を根拠に、『源語梯』から『源語類聚抄』が成立したと考えておられることに従いたい。

このような三者の密接な関係は、分類項目に目を転じても納得できる。いま三者の項目を比較すると、『源語詁』の項目は12字・2字・10字・2字とばらばらであるのに対し、『源語梯』『源語類聚抄』後者は全て一項目四文字である。内容を見ると『源語詁』の「天文地理時侯居所宮室鬼神」の傍線部が、『源語梯』などでは「天地時侯」と圧縮され、また『源語詁』の「人倫支體草木禽獸蟲魚」の傍線部が、『源語梯』などでは「生植気形」とされつつ、二分割される。『源語詁』の項目を洗練したのが『源語梯』『源語類聚抄』のそれらなのである。

さて『仙源抄』に始まる、イロハ分類と、『源語詁』から始まる意義分類は、密接に関連する分類法であったと考えられる。というのは、辞書（本稿では類書・字書・韻書などを指す）の項目の立て方を通覧すると、『色葉字類抄』以来、イロハ分類と意義分類が密接に関わりながら用いられ続けているからである。表2に、主だった書の分類内容を示す。

調査した辞書は、元和古活字本『和名抄』、前田本『色葉字類抄』、十卷本『伊呂波字類抄』、天文本『字鏡鈔』、白河本『字鏡集』、『名語記』、『塵袋』、『平他字類抄』、『聚分韻略』、元和三年版『下学集』、『撮壤集』、『壘囊抄』、『塵添壘囊抄』、『頓要集』、いわゆる「古本節用集」（伊勢本系A＝明応五年本、伊勢本系B＝伊京集、伊勢本系D＝饅頭屋本、伊勢本系E＝早大本『節

用集』、伊勢本系G = 文明本、印度本系A = 弘治二年本、印度本系B = 黒本本、印度本系C = 永禄二年本、乾本系 = 易林本)、『温故知新書』、『多識編』(草稿本・寛永八年製版本)、「近世節用集」(但し『合類節用集』《延宝八年刊本》)、『倭訓栞』、『雅言集覽』、である。

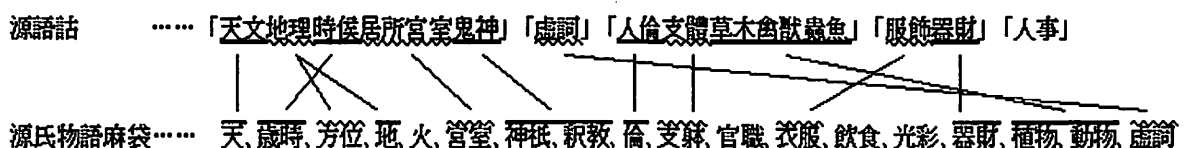
イロハ分類と意義分類を共用するのは『色葉字類抄』『伊呂波字類抄』『平他字類抄』『古本節用集』『近世節用集』である。辞書の性格に応じて、これら二つの分類の片方が単独で行われたり、その他、韻・部首などによる分類が併用されることもある。『仙源抄』に始まるイロハ分類の注釈書と、『源語詰』から始まる意義分類の注釈書は、①イロハ分類と意義分類が古辞書において共に一般的に用いられ続けていること、②意義分類の具体的項目が古辞書にも多く存在すること、以上二点からして辞書の構成・項目をかなり参考にして作られていると考えられる。とすると、イロハ分類の注釈書と意義分類の注釈書とが、共に辞書的分類を受け容れ、言葉そのものの世界に注視する辞書的発想を基盤に据えている、ということになる。『源氏物語』の物語内容そのものからは離れて、物語の言葉の体系に注視しようとする志向が、打ち出されているのである。

以下、辞書と『源語詰』『源語梯』『源語類聚抄』の関係について、分類の具体的内容からうかがってみたい。結論から言えば、特に『聚分韻略』やその影響下にある『温故知新書』、また「古本節用集」(とりわけ乾本系の『易林本節用集』)との類似が、目立つように思われる。代表として『易林本節用集』と『源語詰』の項目を掲げ、両者がどのように対応しているのか見てみる。

易林本… 乾坤 時候官位官名神祇 人倫支体草木気形 衣食器財 「数量」「名字」「言語」

源語詰… 「天文地理時候居所宮室鬼神」「虚詞」「人倫支體草木禽獸蟲魚」「服飾器財」「人事」

「乾坤」には「天文地理」が相当し、また「気形」は、大漢和辞典に「動物をいふ」とあるように、「禽獸蟲魚」に相当する。対応しないのは易林本の「数量」「名字」「言語」と、『源語詰』の傍線のない部分(「虚詞」「人事」)とにすぎない。一步進めれば「人倫」という類似項目が既に両書にあるから、「人事」は省かれたのかもしれない。また易林本の「言語」と『源語詰』の「虚詞」(その内容は後述)とは、意外に近いのかもしれない。と言うのは、易林本の場合、字書らしく漢語と和語が一対一対応で存在する語をイロハ別に列挙してあるのだが、『源語詰』の場合は和語を基本とする『源氏物語』を対象とする以上、おのずと語彙の内容・範囲が変化しているからで、対象や目的が異なる結果として、「言語」と「虚詞」の違いが生じただけでも考えられるのである。以上のように考えると、両者の分類の仕方は非常に近くなる。この見方は『源語詰』の影響を受けている『源語梯』『源語類聚抄』にも、当然当てはめることができる。『源氏物語麻袋』はややことなるが、以下のように大部分が対応し、『源語詰』を一層拡充した形になっている。



また『源氏物語麻袋』の項目の最後に「虚詞」が移っているのは、『字鏡抄』『字鏡集』『下学集』『古本節用集』『近世節用集』などの古辞書で、言語の項目が最後に位置することに倣ったのであろう。以上の諸点を踏まえると、全体としてはこれら四者の類聚的源氏物語の辞書に、『聚分韻略』や『古本節用集』などの構成の仕方が関わっていると、考えてよいのだろう。

ただし「虚詞」(稀に「虚辞」)の項のみ、今回辞書に全く見いだすことができなかった。この項目がどこからもたらされたのかは、残された問題の一つである。まず『源語詰』桐壺巻の「虚詞」の項を例にして、「虚詞」の中味をうかがっておこう。

い いらへ／いかめしう／いみじき／**る** **は** はしたなき／はかなく／はかはかしう／はた／**に** にほひ にほひやかに／になう **ほ** **へ** **と** とみに **ち** **り** **ぬ** **る** **を** おほかた／おもたゝしき **わ** わりなき／ わたくし物 **か** かしこき／かし／かうやう／かたくな／かよひ／かたはらいたし **よ** よせ／ようせすは／よそほし／**た** たらす／たうり／**れ** **そ** そゝのかし／そこら **つ** **ね** **な** **ら** **む** **う** **ぬ** **の** **お** おかしき／おしなへたらぬ おほなおほな……

形容詞、形容動詞、副詞が多い。「いらへ」「よせ」「たうり」(道理)といった名詞や、「そそのかし」といった動詞も混在するが、意味内容がいずれも具体的実体を伴わないことに注意しておきたい。これは『源氏物語麻袋』でも同じで、同書の「虚詞」の最初「い」の一丁表のみ掲げると、

いつれ／いよいよ／いと／いつしかと／いそぐ／いさむる／いみしう／いとゝ／いといたう／いふかたなく／いたう／いらへ／いとゝ／<sup>(ママ)</sup>いかさまに……

とある。『源語梯』『源語類聚抄』では「虚詞人事」となっているから単純に比較することはできないが、「虚詞」自体の捉え方は『源語梯』『源語類聚抄』も同じであると考えられる。

大漢和辞典は「虚詞」を「むなしいことば。実功のないことば。」として、『商子』の用例を掲げる。また広漢和辞典は「虚詞」を「①むなしいことば。実効のないことば。②虚字の②」として、「虚字」の「②」において、

実字(名詞、代名詞、動詞、形容詞、副詞)に対して、前置詞、接続詞、終尾詞などをいう。虚詞。虚字[虚字説]。[虚字注釈備考]

とする。また漢語大辞典の「虚詞」「虚字」の説明も、広漢和辞典とほぼ同じである。四つの注釈書の「虚詞」とは異なるのである。実際に四庫全書や四部叢刊で「虚詞」の用例を検索してみても、「むなしいことば、実効のないことば」といった意味の用例ばかりである。中国での本来の意味・用法からどれほどか飛躍した所に、四つの注釈書の「虚詞」があったと考えられる。

注目されるのは、大漢和辞典の「虚字」の項である。

①無駄な字。[詩品](引用者注:用例略ス)②実字・助字以外の字。二説あり。一は実字を天・地・山・川・草・木等の形ある文字とするに対し、飛・流・行・走等の形の無い文字を虚字とするもので、一は名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞等凡て意義ある文字を実字とするに対し、於・于・者・則・哉・焉等の前置詞・後置詞・助動詞・歇尾詞・転接詞・感動詞のやうに一定の意義の無い文字を虚字といふ。

②の特に前半部の考え方が適合するようである(ただしその場合、名詞を実字としその他の品



詞を虚字とする、というような分類法に立つ必要があるが)。以上を勘案すると、漢から和への受容過程のどこかで、「虚字」②の前半部の意味内容が、「虚詞」という漢語と結合した、ということになる。

ここで『聚分韻略』『温故知新書』の「虚押門」に注目したい。「虚押」は大漢和辞典、広漢和辞典、漢語大詞典、に立項がなく、和製漢語である可能性が高い。例えば『聚分韻略』の冒頭「東第一（上平）」の「虚押門」を挙げると以下のようなになる（6）。

忽〈速也〉／通〈一達〉／蒙〈覆也〉／洪〈大也〉／豊〈盛也〉／充〈塞也〉／隆〈盛一〉  
 ／崇〈高一〉／触〈和一〉／窮〈一極〉／汎〈浮也又〉／同〈齊一〉／中〈一平又〉／衷  
 〈正也中也又〉／濃〈厚貌〉／襪〈衣厚白〉／沖〈和也深也〉／終〈竟也〉／逢〈水不遵  
 道又〉

動詞・形容詞・副詞に相当する字ばかりで、具体的な実体を伴わないように見える。『聚分韻略』の影響を受けたといわれる『温故知新書』は、例えばアの部の「虚押門」を掲げると次のようである。なお左ルビや左側の注記は、便宜上省略する（7）。

アキラカ 同 アハラカ 同 アハラカ 同 アハラカ 同 アハラカ 同 アハラカ 同 アハラカ 同 アハラカ 同 アハラカ 同 アハラカ 同 アハラカ 同  
 明 在 爽 隱 徵 黃 仕 鮮 蓊 修 上 揚 須 舉 交 中 皮〈弓矢〉 當 膺 貫  
 アタム 同 アタム 同 アタム 同 アタム 同 アタム 同 アタム 同 アタム 同 アタム 同 アタム 同 アタム 同 アタム 同  
 〈弓矢〉 翳〈句〉 跡 迹 蹤 痕〈瘡〉 糺 拏 蒟 末 焉 曉 頸 痛 醜 胥 乞  
 アカラサマ 同 アカラサマ 同 アカラサマ 同 アカラサマ 同 アカラサマ 同 アカラサマ 同 アカラサマ 同 アカラサマ 同 アカラサマ 同  
 暫 昨 假 僮 儉 黠 抵 淋 邁 零 惜 哉 添 羿 優 周 洽 賦 适 惘 互  
 アサマシ アモト アララカ アラアラ アラカタ アラユル アニ 同 アケテ アニ アハレ アリサマ アト 同 同 アラケ  
 浅 猿 畔 粗 略 龜 津 所有 臍 他 勝 豈〈安焉〉 愛 拳 動 都 於 咨 索  
 アリトコロ アリサマ アキ アヤ 同 アシキ アチンス アシキ アサマシ アヒアハス アツクレタリ アリ 同  
 處 状 寶 兩 文 絢 若 期〈當尚〉 惡 摑 櫃 疣 然 有 在

和訓を手掛かりに、以下品詞を分類する。主要な語のみ掲げると以下のようなになる。

- 形容詞……アサラケシ・アキタレイヤシ・アツタラシ・アマネハシ・アシ・アサマシ・アツクレタリ（語幹アタラ）
- 形容動詞……アキラカ・アサヤカ・アヤニク・アカラサマ・アララカ・アラカタ・アハレ
- 動詞……アカル・アサナハル・アラハス・アラハル・アヒアフ・アチル・アヤカル・アタル・アタム・アリ
- 名詞……アハヒ・アタリハツレ・アト・アリサマ・アリトコロ・アヤ
- 副詞……アラアラ・アゲテ・アニ
- 連体詞……アラユル
- 感動詞……アア

明らかに形容詞、形容動詞、動詞が多い。また名詞はみえるものの、具体的な実体は伴わず抽象的である。『聚分韻略』『温故知新書』のこのような「虚押」の内容は、本稿で問題にしている四つの注釈書の「虚詞」の内容と非常に似ていると思われる。ちなみに『聚分韻略』が影響を受けている『広韻』や『集韻』に戻ってその語彙を見ても、以上の「虚押」のような分類項目はなく、中国までは遡れない。

とすると、『聚分韻略』『温故知新書』のような日本の韻書の「虚押」の内容が、「虚字」の内容をも取り込みつつ、「虚詞」という漢語と結合した結果、四つの注釈書の「虚詞」が実現したということになってくる。

以上、『源氏物語』の注釈書が作成されるに当たって、古辞書が参考にされている様相を、分類の方法の面から窺ってきた。もちろん今後の課題は残る。第一に対象とする古辞書の範囲を、日本の古辞書はもちろん中国のそれをも視野に入れ、より一層広げることが必要であろう。第二に例えば「虚詞」の用例の場合のように、古辞書からその周辺に視野を拡大していくことも必要である。さらに一步先の課題として、注釈書の大分類ではなく個々の項目自体が、古辞書の項目とどのように関連するかという問題もある。それらは全て今後の課題としたい。

#### 注

- 1 増訂版『国書総目録』によると園田女子大学蔵吉永文庫本・旧徳島光慶図書館本があるが、後者は焼失した由。前者の本文は国文学研究資料館のマイクロフィルムに拠った。
- 2 本文は「平安文学資料稿」一期、第四巻による。
- 3 本文は広島大学の九曜文庫蔵橋守部自筆稿本を翻刻した、「平安文学資料稿」第三期第九・十巻による。
- 4 翻刻平安文学資料稿第四巻『源語梯』の「解説」(1969・8)
- 5 注3の第十巻『源語類聚抄 下』の「解題」(2003・6)。
- 6 本文引用は、『古辞書研究資料叢刊1 聚分韻略』(大空社、1995)に拠る。
- 7 引用は『尊経閣善本影印集成 温故知新書』(八木書店、2000)に拠る。

表1 分類標目による分類をした『源氏物語』注釈書の一覧

\*含む和歌集の配列。ただし評論的部類・特定のkotogara(衣服、調度、音楽など)についての部類書はのぞく。

作品名(別名)	著者	内容	成立年代
1 仙源抄	長慶院	イロハ順で、語句註を列挙。	弘和元年1382成
2 類字源語抄	師成親王(笠源惠梵)	イロハ順で、語句註を列挙。	永享三1431成
3 仙源類聚抄	?	仙源抄と類字源語抄とを合冊したもの。	?
4 続類字源語抄	法眼紹永	類字源語抄に増補するため、仙源抄の中より類字源語抄にない註を抄出したもの	文明十一1479成
5 続源語類字抄	?	イロハ順に語句をあげ語釈。『類字源語抄』に比して掲載語句の出所巻名を多く注している。	慶安四1651年奥書あり
6 水滴色葉類聚抄	三光院実澄	仙源抄と源語類字抄から語句をいろは順に抜抄して合わせ載せた(註をも共に載せ、また私云とて実澄の今案をも加え掲げてある)。	永禄三年1560十一月成
7 源氏目安(『源氏目案』『類字源語抄』『源語爪印』)	?	各巻の要語をいろは順に配列して簡単に語釈を注した。語数は仙源抄の約二倍。	万治版1658-1661源氏物語枕本に付刻され、それ以前成立
8 源氏註解(『源氏物語解』)	?	各巻名の下に巻名出所歌をあげ、巻中の語をいろは順にあげて解釈。	?
9 源偶篇	契沖	イロハ順(その内部は巻順)の単語注解。	貞享二1685成
10 源語詞要	盤元院か	源氏中の語句を分類したもの。動物・植物・雑物の三部のみ。	享保十七1732年八月以前か
11 源語詰	五井純禎	「天文地理時侯居所宮室鬼神」「虚詞」「人倫支體草木禽獸蟲魚」「服飾器財」「人事」の各項に分けて、巻順(内部は一部イロハ順)で、語釈を列挙する。	宝暦八1758以前成立
12 源語梯	?	イロハ順で、その内部は、「虚詞人事」「天地時侯」「人倫支體」「生植気形」「服食器財」に分かつ。『源語詰』を纂訂刊行したもの。	天明四1784刊
13 源語類聚抄	源義亮	イロハ順で、その内部は、「虚辞(詞)人事」「天地時侯」「人倫支體」「生植気形」「服食器財」に分かつ。	天明二1782以降か
14 草中源氏物語	尾崎雅嘉	五十四帖人物一覧と題して物語中に人物をイロハ別にあげて簡単に説明し、また五十四帖故事一覧と題して、物語の事項をイロハ別に解釈したものを加え、初に総論解説を附したものの。此の事項索引の前半は源偶篇に附した源氏故事詞分と全く同じ。	寛政九1797序、天保八1837刊
15 源氏物語不拂塵	本多忠憲	湖月抄によってイロハ引きにして、語句の巻名丁数をあげたもの。	文化四1807成
16 紫文製錦	橋本稻彦	春部、夏部、秋部、冬部、恋部、雑部の六部を設け、例えば春部を更に、初春、子日、鶯、鶯、春雪、余寒、梅、柳、春月春夜、春曙、帰雁、花、山吹、藤、若春、春雑といったふうに細分。源語中の美文を列挙する。文章を書く人の模範とすべき箇所の類聚。	文化四1807成るか
17 源氏物語玉の御須磨流	荒木田守訓	五十音順の語をあげ、その語を含む文章を一々あげて詳しく解釈し、傍注に俗語訓を付す	文化十1813成
18 源氏物語詞寄文化考	中野貞利	源語中の要語をイロハ順にあげて簡単な語釈をしたもの。	文化年中1804-1817成?
19 源氏物語麻袋(『源語便覧』)	榎並隆璣	一天部、二歳時部、三方位部、四地部、五火部、六宮室部、七神祇部、八釈教部、九人倫部、十支體部、十一官職部、十二衣服部、十三飲食部、十四光彩部、十五器財部、十六植物部、十七動物部、十八虚詞~二十四虚詞にわけ、各巻を更に細分する。そして源氏物語各巻の順序で、その内容の語句をあげる。	文化十三年(1816年)か
20 源語字音抄	?	源氏物語中の字音語をイロハ順にあげ、下に漢字を当てたもの。	文政二年1819写
21 源語雅言解(『雅語纂解』『源語纂解』『雅言纂解』)	菅原種文	イロハ引きの源氏辞書。簡明	天保五1834成
22 源氏物語類語(『源語類字』)	岸本由豆流	湖月抄を底本とした、イロハ引き要語索引。	弘化三1846没以前成る
23 源氏事類	?	イロハ順に諸種の事物の名称をあげ、その名称に当る物語本文を抜抄したもの。	?
24 源氏彙事	畑中盛雄	物語中の事物事項(春夏秋冬、羈旅、哀傷、慶賀、儒学、鬼神、仙釈、人倫、支體、天象、時候、地儀、郡国、居所、草木、禽獸、酒食、衣服、器財、舞樂、詩歌)の二十四部の語句を分類して、検索の便を図る。	?
25 源氏彙言	畑中盛雄	その語があつて実体のないものを、イロハ順にあげる。	?
26 源氏物語類語	足代弘訓	語句を五十音順にあげる。	安政二1855成るか

【参考】藤田徳太郎『源氏物語研究書目要覧』、東京堂『源氏物語事典』、重松信弘『増補新攷 源氏物語研究史』

表2 古辞書と類聚的『源氏物語』注釈書の分類標目

\*注 項目は辞書名・本稿の扱った本やその成立年次・その辞書全体の成立年次(西暦)・分類の方法・分類内容の順である。( )は常に立項されるとは限らない項目であるか、ままた見られる項目表現であることを示す。

和名抄	色葉字類抄	字鏡鈔	聚分韻略	下学集	擬境集	古本節用集		多識編		近世節用集	源語結	源語梯	源語類聚抄	源氏物語麻袋
元和古語字本 承平四頃	前田本 天養~治承年間	天文本 寛元三年以前	無刊肥十行版	元和本 文安元年	群書類従本 享徳三序	伊京集	弘治二年本	易林本	羅浮涉獵抄本	寛永八年重訂本	延宝八年本			
934頃	1144-5~1177-81	1245以前	1306百序-07跋	1444	1454	1444後まもなく		1612年?	1631年	1680年刊	1758年以前	1784刊	1782以降?	1816年?
意義	イロハ一意義	意義一漢字部首	韻一意義	意義	意義	イロハ一意義	イロハ一意義	イロハ一意義	意義	意義一イロハ	卷一部分的にイロハ	イロハ一意義分類	イロハ一意義	意義一卷順
天部	天象付歳時	天部	乾坤門	天地門	天象部	天地	天地	乾坤	水部	天地部	天文地理時侯居所宮室鬼神	虚詞人事	虚辞(詞)人事	天部
人倫部	地儀付居処并居室具	植物部	時候門	時節門	風雨部	時節	時節	(時候)	火部	時候部	虚詞	天地時候	天地時候	歳時部
形體部	植物付植物具	動物部	気形門	神祇門	佛部	草木	草木	(官位)	土部	居室部	人倫支體草木禽獸蟲魚	人倫支體	人倫支體	方位部
疾病部	動物付動物体	人倫部	支體門	人倫門	神部	人倫	(光彩)	(官名)	石部	所名部	服飾器財	生植気形	生植気形	地部
術芸部	人倫付鬼神類	人跡部	態芸門	官位門	祈祷部	官名	人倫	(支體)	草部	神祇部	人事	服食器財	服食器財	火部
居處部	人體付病瘡類	人事部	生植門	人名門	寺院部	(人名)	(病名)	(支體)	穀部	官位部				官室部
舟車部	人事付芸術并産業	飲食部	食服門	家屋門	諸宗部	人体(支體ト)	人名	草木	菜部	苗氏部				神祇部
珍宝部	飲食	雜物部	器財門	氣形門	四時部	財宝	(官名)	気形	果部	人物部				神祇部
布帛部	雜物	光彩部	光彩門	支體門	年中行事	畜類	支體	衣食(食服ト)	木部	人支部				釈教部
装束部	光彩付絵丹并絵色等	方角部	数量門	態芸門	衆色類	(衣服)	畜類	数量	器器部	疾病部				支林部
飲食部	方角	貝数部	虚押門	絹布門	地儀部	食物	食物	(名字)	虫部	草木部				草木部
器皿部	貝数	字辞部	複用門	飲食門	海部	(数量)	器財(器財ト)	器財(財宝ト)	鱗部	魚鱗部				魚鱗部
燈火部	辞字	雜字部		器財門	船部	言語進退	食物	言語(言語ト)	介部	介貝部				介貝部
調度部	重點			草木門	海藻		(色字)	(神祇)	禽部	龍蛇部				龍蛇部
羽族部	昼字			彩色門	漁獵		(数量)		獸部	蟲彘部				蟲彘部
毛群部	諸社			数量門	魚部		言語進退		人部	禽鳥部				禽鳥部
牛馬部	諸寺付盤驗所			言辞門	鳥部					諸獸部				諸獸部
龍魚部	国郡付名所				獸部					衣服部				衣服部
龜貝部	官職				虫部					飲食部				飲食部
蟲彘部	姓氏				草木部					湯火部				湯火部
稻穀部	名字				五穀部					器財部				器財部
菜蔬部					農作 附農器					疑字部				疑字部
菓藏部					乘物部					数量部				数量部
草木部					燈燭部					言語部				言語部
					金玉部					介部				介部
					京洛 附行旅					禽部				禽部
					芸術部 附諸芸具					獸部				獸部
					紙部					支體部				支體部
					家屋部					人部				人部
					人倫部					田制門				田制門
					医書部					束箱門				束箱門
					官位部					錢鑄門				錢鑄門
					武職					鉦艾門				鉦艾門
					樂目錄 附樂器					把扒門				把扒門
					衣服部					籙賣門				籙賣門
					經論部					杵臼門				杵臼門
					本書部					倉庫門				倉庫門
					歌道部					鼎釜門				鼎釜門
					遊樂部 附遊樂具					舟車門				舟車門
					飲食部					瀝瀝門				瀝瀝門
					香部					利用門				利用門
					絵部					鞋襪門				鞋襪門
										蚕織門				蚕織門
										織紙門				織紙門
										續絮門				續絮門
										藪芋門				藪芋門